

第3回青梅市総合長期計画審議会会議録（概要版）

1 日時 平成23年12月21日（水）午後2時～4時

2 場所 青梅市役所 2階204・205・206会議室

3 出席委員

篠原委員、館委員、米村委員、杉村委員、山井委員、和田委員、野崎委員、
志村委員、稲葉委員、岩田委員、村野委員、林委員

4 議事

（1）会長あいさつ

（2）説明事項

基礎資料等について

国勢調査結果にみる青梅市の人口動態と将来動向について

第6次青梅市総合長期計画基本構想の検討について

（3）委員意見交換

（4）その他

次回の開催等について

その他

（配布資料）

資料1 平成23年度第6次青梅市総合長期計画策定スケジュール

資料2 おうめ子ども未来会議（ワークショップ）報告書

資料3 おうめ子ども世論調査結果報告書

資料4 総合長期計画策定のためのまちづくり政策提言

資料5 第28回市政総合世論調査報告書（改訂版）

資料6 青梅市総合長期計画策定のための基礎調査報告書～60年の歩み～（改訂版）

資料7 国勢調査結果にみる青梅市の人口動態と将来動向

資料8 - 1 第6次青梅市総合長期計画基本構想の検討

資料8 - 2 青梅市総合長期計画の構成

5 議事内容

発 言 者	会 議 の て ん 末 ・ 概 要
企画部長	ただいまより第3回青梅市総合長期計画審議会を始めます。 (連絡事項) (資料の説明)
会長	今回は、前回お約束したように、なるべく説明の時間を少なくして自由に議論をしていただく会にしたいので、活発な議論をお願いします。ただ時間には限りがあるので、事務局との打合せでは一応2時間にしています。 それではまず事務局からの説明をお願いします。
事務局	資料説明
会長	これからまず質問を受け付けて、その後みなさんの意見を出し合って議論していきます。 私から一言だけ。資料7の3ページの人口予測を見ると、やはり減っていくかもしれませんが、青梅は恵まれている。仕事で佐渡などに行っていると、人口10何万で、毎年1000人、2000人と減っている。つまり高校を出ると、大学への進学や就職する場所がありません。高校を出るとどんどん減ってきてしまう。青梅市は就業の場所はまあまああるし、通勤もできる。そういう意味では全国的にみれば恵まれているとつくづく思いました。
委員	会長の発言にあわせてという形になりますが、青梅市では、5年間に3000人ちょっと減少している。年間なら600人という数字になり、本当に恵まれているまちかなというのを実感している。この中の流出人口を主導している人数のバランスはわかりますか。 この600人の内訳はわかりますか。
事務局	青梅市の基礎調査の中の増減数の分析の中で、前から遡ると平成13年から見た場合に、平成15年から死亡が出生を上回っていて、自然減となっており、自然減の幅が大きくなっています。
会長	ある年をとって、その年は何人生まれて、何人死んで、何人転入してきて、何人出て行ったと言ってくれたほうがわかりやすい。
事務局	その数字は整理させてください。
委員	私が知りたいのは、高齢化社会・少子化社会なのだから、死んでいる人間が多くて、生まれる人間が少ないというのは、常識というか認識している。それを日本中どこもプラスにはできない。だったら、それをいかに少なくするかというのが、長期計画の一番の目標だと思うので、600人減というのはたぶん本当に恵まれていると思います。先生どうですか。
会長	そう思います。ではあとで資料をもらうことにして、ついでに地

	方の都市に行くと、どんどん高齢化していくのはしょうがないので、うまく交流人口といわれる人に、いっぱい来てもらって活気を出したいというのが多い。そういう観点でいうと、観光において、観光客が増えているのか、何とか横ばいで保っているのか、減っているのか。資料はあとでいいです。施設別にでもデータがあるとわかりやすいですが。 質問だけでなく、ご意見があればどうぞ自由にお願いします。
委員	資料6「総合長期計画策定のための基礎調査報告書」の12ページに、道路の延長の話が出ているが、前にあった道路がガクッと減ってしまったというのがわかるが、なぜでしょうか。全長でやっているはずだから、道路をつくっているにもかかわらず少なくなっています。
事務局	注のところに市道の再編が昭和47年と62年にあり変化していると書いてあります。それ以降グラフのとおり着実に増加しています。
会長	昭和47年に増えているのはわかりますが、昭和62年に減っているのはなぜですか。
事務局	62年の時点で、道路台帳の整備があり、それで顕著な変化がありました。
会長	台帳が間違っていたということですか？ ただ、これも長期計画に大きくかわるわけではないので、あとで調べて報告してください。
委員	資料4のまちづくり政策提言の19ページに団体アンケートのとりまとめがありますが、団体というのは何ですか？それと市からアンケートを配って回答をもらったものですか。
事務局	一般市民個人に対する団体という意味です。民間や社団法人としての団体ということで対象は広く含んでおります。それとアンケートは、個人については、インターネットや広報で周知しました。団体に対しても、聞く項目は若干違うが、同じ形で広報をしております。その結果、興味を示していただいた団体から応募をいただきました。意図的にこちらからお願いしたところはありません。
委員	ここに出ている「NPOサローネ」というのは私がメンバーとして立ち上げた団体です。青梅の駅前の跡取り娘が自分のおしめを自分の娘に取り替えさせたくない。私も自分の親のおしめを取り替えたくない。ではどうしたら、それをしないでいけるのだろうと考えるところからつくったNPOです。ここに出ているが、あくまでもHPを見て、自主的に自分たちの考えが長期計画に少しでも反映されるといいなと、ただ単純な意味で出しました。 今回、一般公募という形で審議会に出させていただき、正直言って、この青梅のまちで育ち、青梅しか知らずにきましたが、自分の子どもや亭主は身近だから粗ばかり探しています。でも、外に出てもう一度青梅を見てみたら、どこに行ってもすごく驚かされます。

	こういうことを発表する場が他の市町村より整備されているような気がします。もちろん十分かどうかといえ、もっとすばらしい市町村があるが、多くのまちはもっと閉鎖的で、市民の声が届かないという、出せる場所がありません。私のように言いたかったら自分で手を上げて、参加してくればいいので、公募して出てくださいいいのであって、正直言って、かかわる前までは、すごく閉鎖的だと思いましたが、思ったより風通しがいいと最近感じ始めています。
会長	うらやましいですね。横浜市民なんて300何十万人もいる。それでは届きませんね。
委員	まちづくり政策提言は、小学生と中学生を対象にして、なかなか面白く拝見していますが、一般の世論調査によると、確か24歳～29歳までは回答が非常に低くて、本当にその年代の、若い人たちの意見を十分に取り入れられているのかと疑問に思った。学校でやったというのは、回答率も高いだろうし、少年たちの意見はなかなか聞こえてこない。今後同じようなことを大学生や一般の就労されている方からもとめるのかもしれないが、そのあたりの計画はありますか。なぜ小学生・中学生に限って今回政策提言をお願いしたのか、説明してほしい。
事務局	今回、民意の反映の手法ということで、あらゆる年代層を対象にしました。ただ、これまで大人の意見が多く、普段なかなか市政に反映しにくいのは子どもの声だと考え、その中でたまたまターゲットを小中学生にしました。まちづくり政策提言については、広く市民と団体としたが、高校生、あるいは大学生についてもインターネットなどの媒体を通じて、対象にすることができると考え、特に市立の小中学校を教育委員会との連携によって対象としました。ただ、高校・大学については、年齢層の分析の中で対象となっていないとすれば、その意見反映は今後の課題だと思います。
委員	結論としては同じかも知れないが。というのも小学生の意見をみながら、子どもたちが言っていることは、まったくそのとおりと改めて意識させられたから。たぶん15歳以降の青少年たちも、同じような考えではないかと予想します。 もし、そこだけギャップがあると、子どもも聞いた、大人も聞いた、これから成人を迎える人たちの真の声を汲み取れないというのは、ちょっと片手落ちかなと思ったので質問しました。
会長	そろそろ意見表明をお願いしたい。こういうまちにしたいとか、こういうところが欠けているとかあれば、お願いします。 私も青梅に来るようになってから随分になるが、橋を見に多摩川に行ったり、公園の状況を見に行ったりします。多摩川、多摩川と言っているわりには、何か行きにくい。ずいぶん高低差というか落差があって、そのへんは市民の方はどう思っているのでしょうか。多摩川はやはり一つのテーマだと思います。
委員	私たちが子どものころもダムがありましたが、川で遊んでいた。みなさん地元で育った方は経験があると思いますが、川で魚を釣っ

	たり、すごく楽しかった。私たちのころはまだ砂利穴といって砂利を掘った穴があって、そこへ落ちさえしなければ遊べた。ただ、あの当時は周りに大人の目がありました。 根本的な問題だと思いますが、川で死ねば国交省が悪いとか。でもそれはちょっと違うのではないのでしょうか。だからリスクを減らすために、何でも禁止になっているのが現状で、変な言い方だけでも、民意というか、民度というか、そういった部分の意識を高めていかないと、自分たちで自分たちの首を絞めている気がします。 理想をいうと、夏休みの間、川を簡単にせき止めるような形で水遊びのできるスペースがあって、膝ぐらいまででいいと思いますが、そういう場所があって、それを若い大学生くらいの、ライフセーバーみたいな人たちがいると、産学連携みたいなものでいいかなと思います。 あと観光にもかかわることですが、今、青梅の駅前にささやかなカフェがオープンし、成木の方の無農薬の野菜を使って、とん汁のようなものを提供する場所をつくりました。現在私は青梅の駅前で商売しているので、2月中旬になると観光客が入ってきますが、観光客がちょうど吉野の方から帰ってくる3時前後というのは、青梅駅前の商店の飲食店が全部閉まっており、居酒屋はまだ開いていない。どこか食べるところはないですかと言われて、とても肩身の狭い思いをしていました。そこでささやかなカフェですが、観光客が入り始める10時くらいから、青梅の産材を使ったちょっとお凌ぎのようなものを用意してくれるようになりました。 それと今まで立川のメーカーが入っていたお菓子屋さんがあったが、事情があって、1月から大門にあるお菓子屋さんが入ってくれます。できたらJAと連携して、地元産の小麦や小豆を使ったお菓子を、まずは1品か2品でもいいから扱う、青梅らしさをアピールできるお店ならいいかなと思います。 また、11月のぶらり青梅宿のときに、私が管理している建物で、地元の若手作家たちに参加していただいた。彼女らがつくる作品が青梅の産品として売り出せるかどうか、商売人の目でみると非常に難しいが、将来、その場所が彼女たちの産品というか、そういうものを担ってくれる場に育ってほしいと思います。 私は男の人を使うのが苦手なので、女の子だけでグループをつくるが、彼女たちにも、子どもを3人産んで、育てられるまち、200人のお母さんが3人ずつ産んでくれる、そういうまちをつくれば600人の人口減はすぐに解消できると思います。そこは協働して、病児保育もやり、働くお母さんに仕事か子育てかと、二者択一を迫らない道を、長期計画の中で考えたい。やはり子どもを安定して育てられるまちというのが、一番かなと思います。
会長	重要な提案だと思いますが、そのためには、どういう条件が必要かというのは、2、3付け加えてくれると行政の方もやりやすい。
委員	それは病児保育ですね。実は数日前まで3泊4日で勉強会に行ってきました。そこに非常に優秀な女の子がいて、私は彼女に言いました。「青梅が子どもを3人育てられるまちにするから、引っ越しておいで」と。 自分も子育てと仕事をしながら一番困るのは病児保育でした。大

	事な会議があるその日の朝に限って熱を出す。そのときに予約もしないで今日、お願いしなすと言って預かってくれるところが必要です。青梅は保育園が比較的整備されているが病児保育はまだです。あとは長時間保育がいいのかどうか分からないが、街がというか、誰かがその子のおじいちゃん、おばあちゃんをやってあげられるような、学童という言葉のくくりとは違う、もっとファミリー的なアットホーム的な、働くお母さんを支える組織というか、場所が必要だと思ひます。
委員	子どものことで引き続き話しますが、関西から青梅に来て、このまちで3人子育てをした。家の裏には森があつてとてもいいなと思ひ、息子たちばかりだったので、とても元気に自然を生かして遊んでくれました。よく地方に仕事に行くが、自然がたくさんあるから、自然で遊んでいるかという、そうではない現状があります。自然があつても安全に子どもたちの遊びを束縛せず見守れる環境が整っていないと遊べない社会状況になっている。だから子どもたちの提言を聞くと自然に恵まれて、お祭りもあつて楽しいというのは本当にうれしいが、そこに大人の目が入つて子どもたちが自由に安全に遊べる環境をきちと整備しないと、多摩川も活かされない。子育て支援のNPOをしているので、乳幼児のお母さんたちと多摩川で芋焼き大会をしましょうと言つても、全部規制でダメ。自然豊かであっても、プレイパークのような設備がない。子どもたちの上下関係もなかなかうまくいかない状態のなかで、大人たちが伝え手にならなきやいけないと思ひるので、その環境整備が必要なことと、多世代交流を子どもたちと一緒にしたいと思ひています。 アナログゲームを持って、団塊の世代のおじさまたちと一緒に保育園とか市民センターを回っているが、そういうところも市民センターしかない。小学校から18歳まで、子どもたちに関する公的なきちと整った施設がないのは、26都市の中で青梅市だけです。その現実を見て、コアになる子ども館のようなもの、多世代交流ができるようなものができれば、市民センターなり、保育園なり、幼稚園なり、学校なり、中高生、大学生までそこから発信できるような、子どもを育てていく、それもたくさんの大人たちの目の中で、規制することなく、温かい目で見守りながら、発信できるようなところが、この10年間の間に一つできれば、ずいぶん変わってくるのではないかと思ひています。
会長	二つあつて、一つは今言われた若い人も年取った人もそこで溜まれて、交流が生まれるような建物がほしい。それと自然の中で十分に活動、遊べるようなシステムづくりですかね。26都市の中で青梅だけないというのは児童館とかですか。
委員	そうです。児童館がないのは青梅市だけ。大型も小型もいろんな児童館を全国でいろいろ見せてもらったが、児童館というと本当に子どもだけとなっている。そうではなくて、いろんな世代が入つて、子どもたちを育てる施設があれば。私たちが小さいころ駄菓子屋さんがあつて、核家族でもおじいちゃんおばあちゃんと交流できました。そういう場がその中でいろいろとセッティングできれば、地域の人と一緒にできればということをしごく考えるし、遊びを通

	じて大人たちの動きを見ていて、子どもたちが大人ができるのなら僕たちもやりたい、もう少し小さな子どもたちと遊びたいという声が出ている。多世代交流というのはとっても大事だなと思います。
会長	なら児童館ではなくて多世代交流館ですか。
委員	子どもの発達に即した絵本とかおもちゃとか、遊びのバリエーションを提供できるようなものを含んだ、多世代交流館みたいなものがあると、とてもいいなと思います。渋谷とかに行くと、下が老人のデイケアサービスで、2階が児童館になって、上下で交流ができるようなところもある。それよりもうちょっとオープンな人を入れてという感じがいいかなと思います。
会長	仕事で山口県の徳山に行っていて、駅ビルを市がそういうふうに使っている。あそこは電車で通学している人もいるから、高校生や中学生が図書室みたいところで本を読んでいる、その脇でNPOの人が活動している。喫茶室もあったりして、なかなかいいなと思っている。建物がどうかというのではなく、そういうスペースがうまくできているかどうかである。
委員	前回の審議会で青梅市は自然に恵まれて、産業も取り残されず、先端的な企業が来て、単にベッドタウンではなくて、昼夜間人口が拮抗した、東京の中でも安全な非常に恵まれた自然もある良いまちであるといいましたが、そこで資料6にある市の総人口の推移はだんだんと高齢化していくということで、その中で気がかりなのは、5ページの昼間人口、夜間人口の推移が書いてあります。出典が国勢調査と注意書きがあるが、昼間人口は平成17年に減少に転じている。また夜間人口との格差が広がっている。要するに昼間働く人とか、若い人はだんだん外に行っている、ということだろうと思う。 次に気になった9ページの商店数と従業員の推移である。これを見ると従業員の数が平成14年を境にずっと減っている。また商店数も減っている。その次の11ページの工場数と従業員数の推移を見ると、平成10年から工場数が758から530とものすごく減っている。今の3つの統計を考えると、青梅には就業機会がなくて、生産年齢はみんな外に出て、昼間人口の中でも年寄りばかりがいる。それでも昼間人口が減っている。要するに、青梅では商店とか工場の就業機会、働く人はみんな外に行ってしまう状況であり、非常に気がかりであります。 このことについての政策を出していく必要があるのではないかと。それが青梅らしく、昼間人口と夜間人口が拮抗して、働く人もいる、若い人もいる。そういう都市にするように、考えていく必要があるのではないかと思います。
会長	重要な指摘だと思いますが、昼間人口と夜間人口のバランスがほかの都市と比べて、例えば東京通勤圏の都市と比べて、青梅が特に差がひどいのでしょうか、良いのでしょうか。
委員	青梅はほかのベッドタウンと比べれば非常にバランスが良かった。ベッドタウンは昼間人口はほとんどいない。これは都市のあり

	方としてはよくない。でも青梅は今までは非常に良かった。働く場所もあった。均衡ある都市だった。今でもそういう点ではアドバンテージはあると思いますが。
会長	ちなみに羽村市など2、3市の状況をとって報告してください。工場のことはよくわからないが、ずいぶん前に外国の中心市街地活性化に関する本を読んで、そうかと思ったのは、商店街がどんどん少なくなっていったり、商売している人も高齢化している。特に日本の地方都市を見てみると、もともと昔からずっと商売をやっているの、土地を借りているわけでもなくて、土地を持っているから、そんなに売れなくても何とか食っていけるという感じです。だけど、イタリアのどこかの都市がある試験というか、ある資格を持っていないと商売させないというしくみがありました。
委員	ヨーロッパにはマイスター制度がありますね。
会長	とにかく、訓練みたいなのがあって、それをパスしないとできない。お菓子屋だけじゃなくて、肉屋も。親がやっているから、何の熱心さもなくて、ただ継いでいるのはダメ。日本はそういうのがないから、新しく商売やりたいという人がいて、入ろうと思っても入れないところがあります。
委員	私が言った小さなカフェも、もともと住吉神社の前にあったが、売上げが上がらない。どうしようかというときに、たまたま空いた店舗があった。私は7倍売れると言ったが、開店1週間で2～3倍に来ている。駅前はまだ腐っても鯛。問題なのは、高齢化した商店主がステージから降りたいが降りられない。閉店さえできない。ステージから降りられる階段をつけてあげて、逆に上ってきたい人がのぼれるステージをつくってあげれば、踊りたい人間はたくさんいます。 また、私は10ページの売り場効率について、店主の観点から、これが青梅市の政策が正しかったのかどうかと疑問に思う。青梅はここ数年で売り場面積が約40%増と大変増加している。これは周りに出来た大きなお店の影響です。それに対して、売り場効率が平成3年の148万から84万に落ちている。つまり売り場だけは増えたが、効率は落ちている。売り場効率が落ちているということは、人を雇えなくなるということです。ここを抑制してほしい。大型店が入っても就労人口は増えない。楽しく郊外のショッピングセンターで買い物しているうちに、夫の仕事はなくなっていたということになる。最初は奥さんのパートがなくなるのでしょうか。 子どもたちの声の中で大きなショッピングセンターがほしいという声がある。確かに便利だし、ワンストップ型で高齢者にも対応されていて、とてもいいが、最近のニュースでイオンが今年は儲かったので11億税金を納めたということがあった。日本中にあれだけあるイオンが年間で11億しか税金を納めていない。それはすごく不自然なことだと思います。 青梅駅前の商店街は、本当に元気だったときは、固定資産税と事業税を含めて、それくらい納めたと思う。もうちょっと地元の商店街が税金を納めることができるようにしていきたいし、なりたい。

会長	長期計画の中でも儲けて税金が納められるように。変な言い方だが、そういうことができるようなステージを、できたら行政に少しお手伝いいただきたい。 もともとまちづくりや都市計画は、日本の弱点だが、商売についてはアンタッチャブルでやっていなかった。それで政府が大型店を認めたので、外にどんどん広がった。今は一つのまちみたいにそこで何時間も過ごせる。子どもをもつ親にとっては便利で、どんどんとられてしまった。 だけど、行政としては難しい。企業誘致だったら、税金はまけますとか、いろいろ手段はあるが、商業についてはなかなか手が打てない。いずれにしても重要な問題だから、考えなければいけない。
委員	青梅は昔、農業・林業が盛んだった。その農業・林業に従事する人が減っているの、こういう現象になっているのではないかと。農業・林業をやっていた家の子どもたちは、跡継ぎではなくて、サラリーマンになったので、そういうのが影響しているのではないかと思います。夜間人口と昼間人口の逆転現象ということですね。
会長	今日欠席の委員だが、メモをつくってあるということなので、事務局から要点を読んでください。
事務局	大きく4つの項目があります。1点目が福祉についてで、市域が広く過疎地もたくさんある。交通機関が十分ではない。民間業者に委託して、不自由な方が自宅にいて、必要なものが購入できるようなシステムとか、関連して巡回の医療サービスも必要になってくる。団塊の世代が定年を迎え、ここ数十年は高齢者が増えることが予想されるので、福祉医療関係は重要な課題である。 もう一つは青梅駅周辺の街並みについてで、ぜひ商店街の電線類の地中化を実現してほしい。また目玉となるような、店・商品・建物等もほしい。市外から人が訪れ、商店街で買い物をし、リピーターが増えるような魅力あるまちづくりを考えてほしい。 3点目は市の人口増。簡単に考えると2代目、3代目の人がこの地を離れずに住み、家族を増やしていくこと。若い世代の人に移り住んでもらうこと。そのためには生活しやすく子育てしやすい環境を整えるために同世代の子どもを持つ親同士の交流の場、子ども社会をつくる必要があると思う。ケミコン跡地の活用も策の一つとして市外から人を呼び込むテーマパークのような建物がほしい。 あとはペットを飼っている人は年々増えている。ドッグランがほしいとの声があり今後の検討課題にしてほしい。
委員	青梅市は人口のわりに比較的施設が多い。老人ホームとか病院とか。ただ実際、そこまではない虚弱な方とか要支援の方にとってはなかなかサービスがなかったり、ちょっと通ってレクリエーションするような施設がないかなと思います。あと買い物が不自由なお年寄りとか、病院にも通にくいとか、かなり重度の方には施設があるが、そこまではない人には介護度の悪化を防ぐようなサービスが必要かなと思います。 そのなかで子ども関係のサービスもかかわってくる。よく富山県

会長	などで、お年寄りと子どもが一緒になって、デイケアサービスとかやるようなところが出てきているが、子育て支援プラス高齢者の介護予防的な多世代交流を兼ねたような施設がもう少しあるといいかなと思いました。 市に対しての質問だが、僕が子どものころとかには、米や酒などよく配達などがあった。スーパーとかがどんどんできてきて、今、配達とかがほとんどないと思うが、青梅ではやっています？
委員	青梅の駅前ではスーパーがやっている。5000円以上だとタダ。すると年寄りの一人暮らしだと5000円は買えない。なので、自主防衛組織みたいなものだが、たとえば八百屋とかは、年寄りがスーパーで買い物した後に、後で持ってきてと、置いていく。それで持って行ってあげる。これは商売ではない。今まで自分のお店を覇権にしてくてくれた人に対して届ける。昔からのただの助け合いのコミュニティである。青梅にはまだそういうものが残っているので、それをうまく、NPO云々ではなく、みんながそういう気持ちになれる分野の一つだけでも残しておきたい。 今、青梅市が青梅駅前を掃除していくが、自分たちで掃除する。それなら年寄りと子どもが集える場所の維持管理のために、投資してほしい。
会長	ちょっと特殊だと思うので、多少配達賃があっても配達ができるシステムができたほうが便利だと思います。
委員	農協ではいろいろ高齢化も感じている。農業関係だと長年の懸案が高齢化と担い手不足と遊休農地の拡大である。これがとまらない。報告書の6ページに、「地目別土地面積」が出ているが、田畑はずっと縮小してきている。今も市街化の農地がたくさんあるが、相続が発生すると、売らないと払えない。それで農地だったところが、あっという間に家が建つ。それが毎年繰り返されている。青梅だけではないが、毎年100haくらい農地が減っている状況です。 市でも平成18年に10年間の農業振興計画を立てたが、農業振興をどうしていこうかが難しく具体的な策がない。いかに遊休農地を一般の人に貸し出すとか、そういう方向に動いている。法律も変わってきているので、そういうことができるようになってきた。農協の直売センターが2か所にあるが、5月になると苗が10万本くらい売れる。一般の方がかなり家庭菜園をやっているようです。 青梅には500人くらいの農家があるが、自家消費の農家がほとんどなので、生産物を出して売っているのは、登録で180人だけである。1000万円以上稼ぐ人はいるが、高齢化で減っている。吉野梅郷にセンターがあるが、小口の出荷者が大勢いるので、それほど出荷量は変わらないが、新町のセンターは広い農地を持っている農家が多く、広い農地をやれず、どんどん減ってきている。そこがどんどん宅地になっていくという状況が続いています。 先ほど、配達の話があったが、農協は奥多摩もエリアで、青梅よりもっとすごい地域があり、平地がないので段々畑に肥料を撒いたりするが、車が入れないので、担いで持っていく。買い物難民ではないが年寄りが多いので、そういうところには1週間でエリアを変

	えて車で配達する。農協は取り扱い物が少ないが、欲しいものは持っていくような取組をしている。下にくればコンビニもあるし、肉屋もあるので、そういうところから買って持っていく。そういう取組をしていくことでだんだんお客様のニーズが増えてくるし、安否確認もできる。小曾木・成木の方も高齢者ばかりなので、そういう取組をしていきたい。これは行政でできる話ではないと思うので、我々が仕事の中で取り組んでいけばいいと思っています。 あと吉野梅郷は梅とゆずの産地で、今年もゆずは豊作だったが、ご存知のとおり、ＰＰＶが２年半前からわかり、今年は吉野梅郷以外の周りの梅の木を5000本切った。来年は梅郷地域で5000本くらい切る。すると梅がなくなってしまうという状況が目の前に迫ってきている。観光資源である梅がなくなると観光客もガタ減りするし、地域の産業も痛手になる。観光関係者、商店街も非常に厳しくなる。これからが課題だが、国が主導でやっている話なのでなかなか進まない。ＢＳＥや鳥インフルと同じ、ウイルス性の防疫の問題なので、いつ終息するのか、なかなか難しい状況です。 これから10年後の青梅の観光はどうなっていくのか、非常に心配である。青梅市でも今、再生計画も上がってきているが、再生計画するためにも早く切って、早く植えないといけない。いかに早く青梅の梅を復活させるかということに取り組まなければなりません。
会長	前半の配達については、市が直接はできないとは思いますが、支援することはできると思う。農協がやっているシステムというのは、どういうものですか？
委員	農協はお客様・組合員さんがいるので、そこから注文が来る。生活用品がすべてそろっているわけではないので、あるものだけはお届けできる。ないものも結構あるが、欲しいと言ったものは「ないから持っていけない」と言わず対応している。どこから調達して持っていけば、お客様が助かるので、そういう取り組みをやっていこうと考えています。
会長	対象は500軒の農家？
委員	そうではありません。500軒というのは、青梅市の農家のアバウトな数です。農協は農家だけではありません。正組合員は農業を営んでいる人であります。規定だと年間30日やっていれば正組合員になれます。農協に出資をいただければ誰でも組合員になれます。
会長	梅の話は難しい話だが、長期計画で触れないわけにはいかない。
事務局	伐採・伐根後の再生計画を策定しています。長期計画でも観光振興、産業振興の観点から位置づけて推進すべき事項ということで、ピンチの状態だが、それを克服して今よりも美しい梅の郷にするという位置づけをしています。その前に国・都に働きかけ、協議して、ＰＰＶへの対応を早期に図ることが大前提として、ビジョンとしては再生計画を位置づけていくのがポイントと考えています。
委員	前回、質問があったと思いますが、市外の委員はどういう魅力が

	あれば、青梅に越してくるか。こういう魅力があれば、より多く来たいということが考えられて、いいのではないかと思います。 青梅はもともと林業のまち。杉をずっと育成してきた。水源林としての杉の山と、林材としての杉があったが、残念ながら、材木としての利用価値が少なくなってきたということで、製材も含めて、その仕事をしている人がほとんどいなくなり、山が荒れているのではないかと思います。これだけ自然の中の山なので引き続き山を大事にしていきたい。杉単独ではなく、針葉樹、広葉樹を含めた混植で、木を長期間にわたって植え替えていくようにして、より我々に優しい山をつくっていただければありがたい。そのためには間伐とかいろいろなことをやらなければいけないが、今、林業をやっている方が本当にいない。土地の所有者かもしれないけれど、放置されていると思うので、NPOも含めていろいろな方々が、山の手入りに携われるようになるといいなと思っている。みんなで山を手入れしていったら、その結果、都民がきれいな水を飲めるというようになるいいなと思っています。 その場合、青梅にはお年寄りが増えたという話だが、老人ホームを含めて、絶対的な要援護者にははいけないと思う。働ける部分で、その人ができる仕事の中で、できることをやってもらう。間伐をするのは無理かもしれないが、下草を刈るのはできるかもしれないし、下草を刈ったものをちょっと動かすことはできるかもしれない。365日老人ホームの箱の中にいて、介護してあげるだけではなく、もっと積極的にまちに出てきて、先ほど、多世代交流という話もあったが、幼稚園や保育園の子どもたちも来て、一緒に手入れができるようなことを考えていただくといいなと思います。 青梅には回遊ルートにすると楽しいところがたくさんあるはず。例えば友田の漬物業者のところからずっと山の中を通して、抜けていくルートとかいろいろあるが、昔の人が使っていた道で、今はけもの道のようになっている。そういう回遊ルートになっているところをもう一度見直して、できることなら回遊ルート間の始めと終わりがそれぞれつながりを持てるようになるいいなと思う。 もう一つは、回遊ルートそれぞれにあじさいのルートがあってもいいだろうし、つばきのルートがあってもいい。いろいろな花や木を活かして、お金をかけるのではなく、名所をつくってほしい。今は個人が一山にちょっと木を植えたら、年間何万人という人が訪れる、観光バスが来るような時代である。青梅にこれだけの土地としての資産があるので、大いに活用するいい施設ができるのではないかと思います。 それから間伐をしてもらわなければいけないが、間伐材を発生しているところでできるだけ処理をして、利用できるような工夫がないだろうか。チップにして、集積材をつくるのもいいし、発酵させるような方法があるかもしれないし、回遊ルートの舗装にしてもいい。間伐をした木材をごみにするのではなく、次の資源にしていただけといいなと思います。 それから長淵丘陵の方を歩いていくと、とんでもない採石場に出て、すごい穴がある。昔の採石場跡地は尾根掘りだったから、山はなくなるかもしれないけど、終わった後に平らな跡地が残って、日野自動車を一時置いておくような場所があった。今は沢掘りされて
--	---

	いるということで、石をとった後は大きな穴が残って、そこに水が溜まり非常に危険な状態になっている。尾根掘りでいくのか沢掘りでいくのかは、景観保護という観点から議論があっそうなっているのだろうが、あそこの山を見ていると、確かにきれいな山が残っているが、裏側を見ると屏風みたいになっていて、景観も何もない状態である。市民ではない人間の勝手な言い方でいうと、この山全部削ってしまって、平らにして施設をつくり、公共の場にしたいほうがよいと思っています。 観光地ということでいうと岩蔵温泉のように青梅の中には、いい温泉場があるし、そのそばには川があって、ときには蛍も出る。だが残念なのは、あそこはダンプ街道になっている。風光明媚で景色を楽しんで、温泉に入って、一時を過ごして、英気を養うというよりも、いつダンプが飛び込んでくるのか心配になる。業者さんとかいろいろ難しいだろうが、できることなら大事な観光資源になるようなところ、自然保護をできるようなところは、もう少し車の規制ができるといいなと思います。 消防・防災という立場で来ているので、東日本大震災があったので、このことだけは皆様に伝えておきたい。 一つは災害対策に対して、やりすぎるということは基本的にはないと思っている。しかもそれは一挙に投入して、後から逐次投入するのはダメだとよくいわれるが、釜石の奇跡と大川小学校の悲劇が今回あった。釜石の奇跡は釜石東中学校の生徒さんと近所の小学校の生徒たちが「てんでんこ」というのか、自分たちの判断で高いところ、高いところへと逃げて行って、結果的に犠牲者が出なかった。それに対して、大川小学校では、校舎の屋上など高いところに逃げなかったため、多くの子どもたちが亡くなった。災害対策では想定をとことん詰めていかなければいけない。 長期計画の中では、今まで青梅市がハザードマップなどつくっていると思うが、もう一度真摯に被害想定をしていただきたい。大量に雨が降ったとき、地震のとき、いろいろあると思うが、どうしても被害想定するときに、これ以上の災害になると、手の打ちどころがなくなってしまう、じゃあ、ここまでの被害にしておこうかということが起こりやすい。集中豪雨では、時間雨量30mmなら、これから対策を立てていけるが、50mmじゃダメだよなんて言っていたのが、30年くらい前。それから30mmじゃダメだから50mmにしようとか、最近都心では100mmを超える時間雨量も出ている。あらゆる種類の災害について、100年といわず1000年スパンくらいの見通しのもとに、どうするか。津波の例でいうと10mの津波はくるが、1000年に一度だから、それは無理というのと、それでもなんとかしなきゃいけないという考え方と、それぞれの地域で二つの考え方が出ていると思う。漁港だから下に住まなきゃダメだということと、生活の場はやはり上にもっていこうというのがある。それは判断だと思うが、被害想定は正確にやっておかねばいけないと思います。 青梅もぜひ被害想定を真摯にやってほしい。今までに交通事故のあった交差点とか、広く燃えた場所だとか、30年、50年の蓄積したものを地図の上にプロットして、その交差点は何で危ないのか、みんなで考える。この地区は何で火事があると燃え広がってしまうのかを考える。この場所は何で小河内ダムの放流があると水の被害を受けるのかを考える、ということができるように、被害想定を根拠
--	--

	を大いに公開していただいて、対策をどのレベルまでするのか。どの対策をするのかは、市長、議会、市役所、市民の皆さんでご検討されることだが、元のスタートだけは、正確にされることを前提に長期計画がつくられれば私がこの場にいた責任が負えるのかなと思っています
会長	防災の話が出たので、市長も所信表明をされたそうなので要点をお願いします。
市長	4期目を継続してできるようになったわけですが、次の4年間をこうしていこうということで12月6日の議会で所信表明をしました。それを今度の「広報おうめ」に出すということで、その原稿が今お配りしたものです。今回、特に3月11日の大震災を受け、また東電の福島第一原発の事故もあり、それを契機に世の中が変わるといって、変えなきゃいけないと思ったのが、4期目に出た一つの要因です。ここに書いてありますが、一番大きいのはいろんな意味での安全安心のレベルアップを図ることで、そのほかにもいろいろありまして、利便性・絆・地域資源・財政運営が書いてあります。その中で今までよりも一段上の安全なまちにするという取組が一番だと思っています。私の方はこうすることでスタートを切りました。1年後にこの審議会でもまとめてもらうので、これがどのような扱いになるのか整理できていませんが、市長からはこういうものが出ているというのも頭の片隅に置いてご議論いただければと思います。
委員	教育の夢を語ろうと、いくつか提案等があります。教育の内容というのは、前回の長期計画もそうだが、かなり網羅的に書かれている例が多い。どこの地方を見ても基本的な内容は同じようになっていて違いがない。青梅の教育を特色あるものにするには、重点化を図っていく必要がある。その基本的な考え方があるかないかによって、ずいぶん違ってくると思う。教育はどうしてもやらなければならない内容がたくさんあるし、お金もかかるし、一つのことだけやっていられないという考え方は十分あると思うが、やはり青梅ならではの教育をしていかないと、子どもたちは青梅の楽しさやここに住むことの良さを実感しないままに生活をして、他の地区に行ってしまうという状況があるのではないのでしょうか。 さきほど委員の提案の中で、その通りだなと思ったのは、自然や地域の良さがあるから、それを子どもたちが体験し、それがいいなと実感を持っているかということ、そうはなっていない。そばにあればあっただけで、親がやるだろう、生活しているうちにわかるよ、という発想では、なかなか地域のことを理解したり、自分の生活につなげていくようなことがないだろうと思っています。 青梅の学校というのは、この地域にいて、どういうことを学ぶべきものなのか、「青梅学」というと大げさだが、青梅の良さを学ぶような教育プログラムができているのか、というのを感じています。市民の方も青梅のことが好きで、子どもたちのかかわりを大切にしたいと考えている人は多いと思うが、やはり青梅の教育力を総動員した形で学校教育を支えていくというプログラムを考えていく必要があるのではないかと思います。その中で青梅を学ぶ学習プログラムをつくりあげていく必要があるのではないのでしょうか。

委員	お祭りがあるから、いいというのではなくて、参加することを積極的に学校教育も取り入れていかなければいけない。多摩川にしても御岳山にしても、ただ遠足で行くというだけでなく、教材にしたり、積極的に子どもたちにかかわらせるようなことが必要になってくるのではないのでしょうか。 どこまで進んでいるのかわからないが、例えば青梅を紹介するような役割を子どもたちが担えないのか、観光にもかかわれる機会はないか、考えていいのではないか。その意味でも人材を活かすシステムとして、地域運営学校というような発想を持っていかないといけないのかなと思っている。学校運営連絡協議会という、校長に意見を言ったり、校長はその意見を尊重して学校経営にあたらなければいけないというシステムはあるが、それがあくまで形式的なものになっていないのか、もっと積極的に教育の中味に意見を言えるような、そういうシステムになっているのかどうか。そのへんも見届けていかなきゃいけないのではないかと思います。 成木地区も含めてだが、これから小規模化が考えられる地域に対しては、小中一貫を本気で考えていかなければいけないのではないのか。建物そのものも含めてということで、ただ教育の連携というだけのことではなく、小学生と中学生が一緒になって学ぶような、そういう一貫校の構想をしっかりと持っていないと、どんどん山間部の子どもたちの教育力が弱くなってしまふのを懸念している。建物は老朽化して変えていくわけなので、そのことを契機としながらも構想を立てていく必要があるのではないかと思います。 もう一つは基礎学力の問題をとっても心配している。学校教育が担っている基礎学力を向上させるわけだが、今までの計画をみると、国の動きを随分見ているので、国語力の向上を図るような取組をしているが、突破口というのは、ただベースを上げるだけではなく、目標になるような、子どもたちが夢を描けるような教育の内容がないと、目指すものがなくなってしまう。算数にしても理科にしても国語が大切だといわれているから、国語をやっているのではなく、もっと先を考えたら、外国語教育であるとか、青梅の子どもたちは少なくとも、今の外国語・英語活動のレベルを少し上げるようなところに目標を置いて、みんなある程度、少し話ができたり、外国人との交流を楽しむような、そういうところに学習の楽しさを持っていくような考え方もあっていいのではないのでしょうか。 みな同じような学校が多い中で、青梅の特色をぜひ出してほしい。これだけ自然が好きだという子どもたちがいて、それは良さだと言っているわけだから、自然を取り込んでいくということと、やはり東京都の中の学校だということを考えたときに、外国語を使うことなども踏まえながら青梅の教育を考えてほしいと思います。 いま話を聞いて、やはりとても恵まれているというか、ほどよい形に、量とかサイズの面でも、質的な面でも、ただこのまま守りの姿勢で、細かい課題はあるが、改善をしていくという形では、10年間は乗り切れない可能性があるのではないかと。そうすると、今配っていただいた、良い点を守り育む青梅と、時代に沿う、変える青梅の方をバランスさせて取り組んでいく。その攻めの部分をこれからどうやって発信していくのか、交流都市、交流人口の話もあったが、地域の中、それから例えば東京都の中の23区の区民の人たちと
----	---

委員	どうかかわっていくのか、周辺のほかの市とどう組むのか、遠隔の地域とどう連携していくのかなど、考える必要があるのかなと思います。全体をいえば、のんびりとかゆるやかとか、スローライフとか、お子さんがつくったKJ法的にまとめた最後のところに「ほんのり」とかという言葉がある。そういう形を守りながら、改善していくというのが方向ではないだろうか。ただ、いろんな案がたくさん積極的に出ているので、これからの、今までの延長ではダメな部分をどう考えていくのが課題なのかなと思います。 みなさんのお話の中に、参考になる話をたくさんいただいた気がします。みなさんとは少し視点が違うところから話をするようになるかもしれないが、子ども未来会議の報告書が非常に楽しかった。子どもたちのこうなったらいいなという言葉ずつがこれだけまとめられているのは、みなさんにも読んでいただきたい。こういうものに表れているのは、少なくとも自分の住んでいるまちのことなので、自分のまちのことはいいまちだと言ってもらいたい、反対からいうと、自分のまちを自慢したい、という気持ちの表れのはずで、その中にある、自然が豊かであるとか、お祭りがあるまち、というのが普通に出てきている。それを自慢したい。するべきだと思っています。青梅が既存の資産として持っているものを活かしつついろんな施策をしていくのは、少なくともコストは減らせるはずだと思います。 すでにある資産をいかに活用して、役に立てるか。これはまず非常に重点的にやっていくべきことだろうと思います。 それをするにあたって、例えば僕は去年青梅第一小学校と第一中学校でそれぞれ2時間ずつ授業をした。そのとき学校から依頼を受けたのは、青梅のお祭りのことについてやってくれということだったが、授業の後子どもたちの反応は、大いに変わった。特に中学校は、その後自主的な研究部会のようなものも発足させて、自分たちは青梅大祭について、どんなことができるのか、企画提言までしてくれることになった。ただ残念ながらやや単発で終わってしまった。その大きな理由は、お祭りが今年行われなかったこと。でも子どもたちの発表の中で素敵な案が出てきたので、主催者側から実現するから一緒にやろうという話も出ている。そういうのは非常に大事だと思う。行政など実行できる人たちが、素敵な企画が出てきたら、それを応援していく体制。それも青梅の資産を使って行うものであれば、おそらくあまりお金をかけずにできると思います。 正直、青梅市は今、お金がないでしょう。たくさんのお金を費やしているいろんなことをするというのはできないと思うが、お金がない分知恵を出せば、業者に出せば100万円かかるものも、50万や30万でできると思う。そのためには、企画力を大事にする必要がある。どこのまちでもお利口さんの能書きは述べられると思うが、その場合、たいていの企画書には一番大事なことが実は盛り込まれていない。それはある種の目的意識、到達点です。 子どもたちがこうなったらいいというのは、例えば先ほど震災の話が出たが、震災の対策はどこでも考えている。その先もう一歩何かを考え、例えば周辺のまちで震災が起きたときに、わが青梅は、誇りある行動がとれるような震災対策ができるのか、といった目標を立てる。ただ単にシステムで対応するのではなく、本当に日
----	--

	本の中でも青梅でなければできないような、誇り高き対応ができるような仕組みをつくろうといった目標を立てれば、そこにみなさんに知恵を出していただけたらと思います。そういうつくり方を向こう10年の総合長期計画の考え方の中に強く打ち出してほしいです。 そうすれば素晴らしい計画が、非常にハイレベルな計画として、青梅の中で策定していける、目標としていけると思います。そのポイントになるのが、あらゆるそういうものについて、ある種のビジネスモデル化をしていく志向を持っていったらどうかというのを提案したい。たとえば先ほど青梅駅前の配達の話がでたが、現在は成り立っているが、中心的な方がいなくなったら、その仕組みは終わりかもしれない。その配達の仕組みをある種のビジネスとして運営して、違う人でもちゃんと続けていけるようなシステムにしていくというような考え方をしていくほうが、よいのではないかと思います。それをつくっていくためには、市が間に立って、交通関連業者、宅配業者、タクシー業者、そういった人たちと集まって、ちゃんとビジネスモデルとして成立させようと、知恵を絞ってつくる。そういうことを考えながら、長期計画のつくり方をしていただけたら、こちらの方々も青梅に移り住もうかなと考えてもらえるかもしれない。ほかのまちとは1ランクも2ランクも違う、ハイレベルなものを持ったまちにしていく。 青梅の中には高齢者の施設が非常に多くある。これほど高齢者のための施設が多いまちは、おそらく全国的にも少ないはずです。そうしたら、高齢者に向けてのサービスはほかのまちより進んでいる部分が多いと思います。それをビジネスモデルというか、進んだ知識を少しでも楽な介護の仕方が現場で積み上げられてきているのなら、市として全部まとめて、まとめたものは、海外も含め、外に売り出してはどうか。今青梅は福祉に関しては日本一の先進の都市だと、そこでまとめられている先進のやり方をほかのまちに売り出してはどうか、というような志向でつくってもらいたいと思います。
会長	今の話について、反論、同意もあると思うが、一通り話を聞いて、時間も過ぎたので、今日はこれくらいにしたいと思います。
事務局	次回の審議会は1月25日午後2時から開催。第5回は2月22日の午前10時からの予定です。
会長	出席できない人にはなるべく出てくださいと言ってください。今日は、ちょっと面白いというか、違った長期計画をつくれそうな目が聞けたのでよかったと思います。